

ISSN 2434-0138

2022 年 7 月 15 日 発行

GENSEI-SEIBUTSU

原生生物

第 5 卷 第 1 号 (2022)

日本原生生物学会

Japan Society of Protistology

<http://protistology.jp>

特別寄稿

原生生物（原生動物）関連の国際学会について 	
春本 晃江（奈良女子大学）	1
日本原生生物学会第55回大会のご案内	
廣野 雅文（法政大学）	6
学会活性会員からのお知らせ	
保科 亮（長浜バイオ大学）	8
学会等開催情報	9
学会員による著作物	9
若手の会 通信	10
本会記事	12
事務局からのお知らせ	
庶務 福田 康弘（東北大学）・庶務補佐 杉浦 真由美（奈良女子大学）	20
編集委員会からのお知らせ	
「原生生物」担当 矢吹 彬憲（海洋研究開発機構）	20

特別寄稿 原生生物（原生動物）関連の国際学会について

春本晃江（奈良女子大学，奈良先端科学技術大学院大学，国際委員 2012年–2021年）

本稿を書かせていただいた理由は，原生生物学関連の国際学会の沿革について知る人が少なくなってきたこと，国際学会の成り立ちや組織について，会員間で意外に知られていないこと，過去の国際学会の情報は調べるのがなかなか難しいと思われたことがある．なるべく早く，これまでの国際学会の沿革についてまとめておくことが必要と考え，私が把握している原生生物学関連の国際学会についてまとめた（表1）．ただし，今回は日本原生生物（原生動物）学会が主に参加旅費援助を行ってきた3つの国際学会，1) International Congress of Protistology, 2) European Congress of Protistology, 3) Asian Congress of Protistology と，4) 日韓合同ミーティングに留めており，本学会の会員が従来よく参加してきた Ciliate Molecular Biology Conference や International Society for Evolutionary Protistology (ISEP) については記載していないことをお断りしておきたい．また，これは私の主観も入った寄稿であることをご了解いただきたい．

1) International Congress of Protozoology（第12回大会までは International Congress of Protozoology）（以下ICOPと略）

第1回大会は1961年にチェコ（当時はチェコスロバキア）のプラハで開催され，その後ほぼ4年に1度，国際大会を開催して現在に至っている．60年以上にわたる歴史があり，参加者数や参加国数で原生生物関連では最も大きな国際学会である．

ICOPを運営するのは International Commission on Protozoology (2009年より International Commission on Protistology) であるが，この国際委員会の発足に至るまでの経緯は，原生動物学雑誌（第1巻第1号）に，当時，日本原生動物学会の14名の幹事（会長は猪木正三氏）の一人であった阿部徹氏により詳しく述べられている（阿部1968）．世界各国の原生動物学者を束ねる超国家的な機関の設立が必要であることを認識し，相互に対等な立場で学会の運営を進めるとした国際委員会の趣旨は今も生きていっていると思う．この国際委員会は，正式には第2回大会（London UK, 1965）の後で設立され（阿部1968, Corliss 1998），第3回大会（Leningrad USSR, 1969）で，International Union of Biological Sciences (IUBS) の Zoology Section の commission として正式に認められたという（樋渡1986）．この国際委員会は設立当初，13カ国より19名の委員で構成されていた．この国際委員会設立の声明文と設立当時の構成員に日本人が名前を連ねていることを誇りに思う．

なお，日本の原生動物学会の初期の頃のエピソードや国際学会との関係については，「日本原生動物学会の生い立ち」（原生生物学雑誌第36巻第2号）に詳しく述べられている．

ICOPは，4年に1度大会を開催してきたが，2021年に開催予定であった第16回大会は，新型コロナウイルス

感染症拡大防止のために延期された（2025年に韓国のソウルで開催予定）．私は第8回大会から第15回大会まではほぼ毎回参加（第11回と第16回是不参加）させてもらったが，それぞれの国の文化に触れ，各国の原生生物学者たちと夜遅くまで語り合った思い出は何ものにも代えがたい．中でも忘れがたい記憶として残っているのが，1989年の第8回筑波大会である（7月10日～7月17日）．樋渡宏一氏を大会長として筑波大学大学会館で開催されたこの大会は，38カ国と2地域より371名の参加者があり，6つの Plenary lectures, 16のシンポジウム，105題の口頭発表と95題のポスター発表という規模の大きな国際学会となった（樋渡，高橋1990）．アジアで行われたにも関わらず，北米やヨーロッパ各地からも多くの参加があり，これほど多くの原生生物の研究者が一度に日本に来日したことは過去にはなかったであろう．当時，私はイタリアのカメリーノ大学で研究を行っており，娘が生まれてひと月後の大会にやっとの思いで参加することができた．*Paramecium* のトリコシストの防御機能について新しい発見を発表することができ，非常に思い出深い大会となった．

ICOPの International Commission on Protistology の位置づけであるが，まず International Society of Protistologists (ISOP または ISoP) について述べたい．この前身である Society of Protozoologist は1947年に米国で設立され，2005年に International Society of Protistology と名称変更された．設立当初から常に国際的な立場を取ることを提唱してきており，米国以外の会員も多い．1954年より The Journal of Protozoology (1993年からは The Journal of Eukaryotic Microbiology) を刊行している．ISOPには，いくつかの国の原生生物（原生動物）学会が Affiliated Section（支部）として加入していた．日本原生動物学会もこれに加わるかどうかについては長年の議論があったが，ずっと加わらないで来た．日本原生動物学会は ISOP とは対等の立場にあるので，その支部になるのは抵抗があるというのが大きな理由であったようだ．しかし2014年に原生生物学会の評議員会で承認され，Affiliated Societyになるという報告が突然会員にメールで周知された．ただしこの位置付けは，支部ではなく，提携学会といった方がふさわしいと思われる．Society Affiliates は，毎年，学会活動のレポート (Annual Reports) を ISOP に提出することになっている．

上に述べたように，ICOPを運営する International Commission on Protistology は，設立当時より ISOP とは独立の組織であったが，経済的な理由や組織運営の難しさから，第14回大会（2013）を前に，大会長の Denis Lynn らの呼びかけがあり，議論の末，第15回大会（2017）より ISOP の Standing Committees（常任委員会）の1つとなった．この大きな変革に，各国の国際委員からは賛否両論があったと聞く．国を超えての

International Commission であるはずなのに、なぜ米国中心の ISOP の傘下に入らねばならないのかという疑問は当然浮かんでこよう。しかし、最終的にこの案が認められ、International Commission on Protistology は、現在では ISOP の International Committee となっている。ISOP の細則 (Bylaws) (<https://protistologists.org/bylaws-of-the-international-society-of-protistologists/>) によると、この国際委員会の委員長は ISOP の副会長が務め、副委員長は次期 ICOP の大会長が務めることになっている。この国際委員会に出席できる各国の投票権のある委員の数は設立当初より決められており、細則にも、会員数が 20 名から 99 名までの学会は 1 名、100 名から 299 名までは 2 名、300 名以上の会員数の場合は 3 名の投票権のある委員を出すことができるとされている。従って日本原生生物学会は、現在のところ 2 名の委員を出すことができる。ICOP の大会に当たっては、会長と国際委員は、国際委員 2 名が大会に出席できるのかどうかを参加登録の締切り前に把握し、欠席する国際委員が出る場合には、出席予定者の中から代理人を選ぶようにしてきたが、近年、それが徹底されていないことがあるのは残念である。International Committee では、議論の末に委員の賛否で議決することもあり、委員の出席数は重要な意味をもつ。会員数に応じて出席できる委員の数が決まっているのもそのためである。日本原生生物学会は国際委員会の構成員であることを認識し、その責務を果たすことを望みたい。

2) European Congress of Protozoology (第 1 回大会は European Congress of Protozoology) (以下 ECOP と略)

第 1 回大会は 1992 年にイギリスのレディングで開催され、その後ほぼ 4 年に 1 度開催されてきた。当初は、ECOP はヨーロッパのそれぞれの国の原生生物 (原生動物) 学会が中心となって運営してきたが、第 4 回大会 (イタリア, 2003) で、ヨーロッパ各国の原生生物 (原生動物) 学会から成る Federation of European Protistological Societies (FEPS) の設立が合意され (Sleigh M 2006), その後は、ECOP は FEPS によって運営されている。現在、FEPS はヨーロッパに位置する 11 の国や地域の原生生物 (原生動物) 学会 (またはグループ) で組織されている。ECOP は European Conference on Ciliate Biology や ISOP の年大会と合同で行われることも多かったため、表 1 には European Conference on Ciliate Biology の過去の大会についても記載している。次回は 2023 年にオーストリアのウィーンで開催 (ドイツの原生生物学会がホスト) が予定されている。

3) Asian Congress of Protistology (以下 ACOP と略)

第 1 回大会は 2011 年に韓国の済州島で行われた。その後、3-4 年に 1 回開催されており、第 2 回大会 (2014) はインド、第 3 回大会 (2018) は中国で開催され、第 4 回 (2021) は日本でオンラインで開催された。ACOP を運営するのは、各国の原生生物 (原生動物) 学会であり、そこが中心となって ACOP 国際委員会を組織しているが、大会長を務めた者が、次期 ACOP 国際委員会の会長になることが慣例とされているほか

は、ACOP 国際委員会について定められた規程はない。今後の運営の安定性を思うと、何らかの組織を設立し、ACOP と ICOP や ECOP との連携も考えるべきかと思う。

ACOP はこれまで Asian Conference on Ciliate Genetics (第 1 回大会は 1983 年) と合同で開催されたことも多いので、表 1 にはこの大会についても載せている。Asian Conference on Ciliate Genetics は ACOP の前身の大会と言えなくもないので、Asian Conference on Ciliate Genetics の第 1 回大会から ACOP の現在までの大会開催地を集計すると、日本 4 回、中国 4 回、韓国 1 回、フィリピン 1 回、インド 1 回となり、次の開催国を考える参考になるかもしれない。また、より多くのアジアの国々での開催を模索したい。

4) 日韓合同ミーティング

第 48 回日本原生生物学会大会 (2015 年, 東京) において、初めて韓国の原生生物学会 (Korean Society of Protistologists: KSOP) との合同企画として「日韓合同シンポジウム JSP-KSOP Joint Meeting 2015」が開催された。韓国からの参加者は 19 名であった。次に、2018 年に「KSOP-JSP Joint Meeting」が済州島で行われ、日本からは 19 名が参加した。2020 年には日本の年大会と合同で「JSP-KSOP Joint Meeting」がオンラインで開催された。日本から 79 名、韓国から 54 名、その他の国からは 18 名が参加し、計 151 名の大きな大会となった。このように定期的に韓国と合同ミーティングを開催することで、お互いの顔や研究内容をよく知ることができ、日韓の研究交流に大いに役立った。この成果は 2021 年の ACOP の大会の円滑な運営にもつながった。今後も韓国とはよりよい関係を続けて行ければと思う。

日本原生生物学会は、2020 年と 2021 年に続けて 2 回の国際学会をオンラインで開催した。コロナ禍の中でも、何とかして国際的な研究交流を維持したいとの思いからであったが、他の学会のオンラインの開催方法を参考にしつつ、Zoom や SpatialChat を駆使した大会は好評であったと思う。時差という問題はあるが、海外からでも容易に大会に参加することができ、会場にいるよりもスライドやポスターが見やすかったとの意見も聞く。参加者数も 2021 年の ACOP では 25 の国と地域から 234 名の参加があり、それまでの ACOP の参加者数を大きく上回った。今後はオンラインでの開催が増えると予想されることから、この 2 つの大会で得たノウハウは今後の国際大会に大いに参考になると思われる。

最後に、日本原生生物学会の会員が国際学会に参加・発表するだけでなく、世界の原生生物学会の中で本学会が果たすべき役割を再認識し、より一層国際的に活躍していただきたいとの願いを込めてこの寄稿の結びとしたい。

参考文献

Corliss J. O. (1998) The Golden Anniversary of the Society

of Protozoologists (1947–1997), J. Eukaryot. Microbiol. 45:1–26.
 Sleigh M. (2006) The Federation of European Protistological Societies, Europ. J. Protistol. 42:1.
 阿部徹 (1968) 「原生動物学会汎世界連盟について」
 原生動物学雑誌 第1巻第1号 P. 30–33.
 樋渡宏一 (1986) 「第7回国際原生動物学会議 (ナイロビ) の報告と第8回国際原生動物学会議 (1989年)

の日本開催」原生動物学雑誌 第19巻第1号 P. 48–51.
 樋渡宏一, 高橋三保子 (1990) 「第8回国際原生動物学会議報告」原生動物学雑誌 第23巻第1号 P. 19–31.
 原生動物学会座談会 (2003) 「日本原生動物学会の生い立ち」原生動物学雑誌 第36巻第2号 P. 129–140.

表1 原生生物 (原生動物) 関連の主な国際学会の沿革

ACOP関連	ICOP関連	ECOP関連	日韓関連
3–4年に1回開催	ほぼ4年に1回開催	ほぼ4年に1回開催	2–3年に1回開催
1961	I International Congress of Protozoology Prague, Czechoslovakia		
1962			
1963			
1964			
1965	II International Congress of Protozoology London, UK		
1966			
1967		I European Conference on Ciliate Biology Edinburgh, UK	
1968			
1969	III International Congress of Protozoology Leningrad, USSR		
1970			
1971		II European Conference on Ciliate Biology Paris, France	
1972			
1973	IV International Congress of Protozoology Clermont-Ferrand, France		
1974			
1975		III European Conference on Ciliate Biology Münster, Germany	
1976			
1977	V International Congress of Protozoology New York City, USA		
1978			
1979		IV European Conference on Ciliate Biology Camerino, Italy	
1980			
1981	VI International Congress of Protozoology Warsaw, Poland		
1982			
1983	I Asian Conference on Ciliate Genetics Sendai, Japan	V European Conference on Ciliate Biology Geneva, Switzerland	
1984			
1985	VII International Congress of Protozoology Nairobi, Kenya		
1986	II Asian Conference on Ciliate Genetics Shanghai, China		
1987		VI European Conference on Ciliate Biology Aarhus, Denmark	
1988			

(次頁へ続く)

(前頁の続き)

ACOP関連	ICOP関連	ECOP関連	日韓関連
3-4年に1回開催	ほぼ4年に1回開催	ほぼ4年に1回開催	2-3年に1回開催
1989	VIII International Congress of Protozoology Tsukuba, Japan		
1990			
1991		VII European Conference on Cell and Molecular Biology of Ciliates Toledo, Spain	
1992	III Asian Conference on Ciliate Genetics, Cell Biology and Molecular Biology Shenzhen, China	I European Congress of Protozoology Reading, United Kingdom	
1993	IX International Congress of Protozoology Berlin, Germany		
1994			
1995	IV Asian Conference on Ciliate Genetics Tokyo, Japan	II European Congress of Protistology and VIII European Conference on Ciliate Biology Clermont-Ferrand, France	
1996			
1997	X International Congress of Protozoology Sidney, Australia		
1998	V Asian Conference on Ciliate Genetics Manila, Philippines		
1999		III European Congress of Protistology and IX European Conference on Ciliate Biology Helsingør, Denmark	
2000			
2001	XI International Congress of Protozoology Sarzburg, Austria		
2002	VI Asian Conference on Ciliate Genetics Tsukuba, Japan		
2003		IV European Congress of Protistology and X European Conference on Ciliate Biology San Benedetto del Tronto, Italy	
2004			
2005	XII International Congress of Protozoology Guangzhou, China		
2006	VII Asian Conference on Ciliate Genetics Wuhan, China		
2007		V European Congress of Protistology and XI European Conference on Ciliate Biology St. Petersburg, Russia	
2008			
2009	XIII International Congress of Protistology Rio de Janeiro, Brazil		
2010			
2011	I Asian Congress of Protistology and VIII Asian Conference on Ciliate Genetics Jeju, Korea	VI European Congress of Protistology Berlin, Germany	
2012			
2013	XIV International Congress of Protistology Vancouver, Canada		
2014	II Asian Congress of Protistology Kalyani, India		
2015		VII European Congress of Protistology and the Annual Congress of International Society of Protistologists (ISOP) Seville, Spain	JSP-KSOP Joint Meeting Tokyo, Japan

(次頁へ続く)

(前頁の続き)

	ACOP関連	ICOP関連	ECOP関連	日韓関連
	3-4年に1回開催	ほぼ4年に1回開催	ほぼ4年に1回開催	2-3年に1回開催
2016				
2017		XV International Congress of Protistology and 2017 ISOP Annual meeting Prague, Czech Republic		
2018	III Asian Congress of Protistology Guangzhou, China			KSOP-JSP Joint Meeting Jeju, Korea
2019			VIII European Congress of Protistology and the Annual Congress of International Society of Protistologists (ISOP) Roma, Italy	
2020				JSP-KSOP Joint Meeting Kobe, Japan (online)
2021	IV Asian Congress of Protistology Kobe, Japan (online)	XVI International Congress of Protistology Korea (postponed)		
2022		XVI International Congress of Protistology Korea (postponed again)		

第55回日本原生生物学会大会のご案内

大会長 廣野 雅文（法政大学）

第55回日本原生生物学会大会は9月1日（木）から3日（土）に、法政大学小金井キャンパスで開催する予定です。開催をお引き受けした当初は2020年の大会を担当する予定でしたが、東京オリンピック、コロナ禍などの諸事情が重なり、春本晃江前会長のご配慮もあって、2022年大会として法政大学で開催させていただく運びとなりました。コロナ感染者数については予断を許しませんが、現在（2022年6月）の減少傾向が続くことを願っております。なお、懇親会につきましては、現在の学内指針により準備ができないことから、たいへん残念ですが、開催を断念いたしました。

大会の企画として、活性化委員会よりシンポジウム「原生生物のジオラマ行動力学（仮題）」をご提案頂きました。これは科学研究費・学術変革領域（A）「ジオラマ行動力学」と連携した企画です。班員には数学、物理、工学分野の方々が多いとかがっていますので、普段は原生生物になじみのない方々と交流ができるのではと期待しております。また、若手の会からは、原生生物を実際に顕微鏡で観察できる「原生生物観察ブース」の設置をご提案頂きました。発表会場近くに簡単な顕微鏡を複数設置して、細胞を直接観察しながら参加者が議論できるようにとのご主旨です。会員どうしの交流だけでなく「ジオラマ」参加者とも交流できるまたとない良い機会になるのではないかと期待しています。

久しぶりの対面開催となるこの機会に、多くの皆様にご参加いただけますようお願い申し上げます。

1. 会期

2022年9月1日～3日

1日（木）：評議員会、編集委員会

2日（金）：口頭発表、ポスター発表、総会

3日（土）：口頭発表、ポスター発表、シンポジウム

予定は今後変更する可能性があります。最新の情報は下記の大会HPで、お知らせいたします。

第55回日本原生生物学会大会ホームページ

(<https://sites.google.com/view/jsp2022/>)

2. 会場

法政大学・小金井キャンパス

(<https://www.hosei.ac.jp/koganei/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54>)

総会・講演会場：西館マルチメディアホール

(<https://www.hosei.ac.jp/koganei/gaiyo/6714/>)

各会議の実施場所についても大会HPにてお知らせいたします。

3. 発表形式

口頭発表およびポスター発表

発表演題数により発表方法の変更をお願いする場合があります。

4. 参加申し込み

要旨提出と参加申し込みは、準備が整い次第、大会HP上で受付を開始します。締め切りは2022年8月5日（金）（予定）です。

5. 大会参加費等

大会参加費等は、参加登録手続き後にお振り込みください。当日参加も受け付けますが、準備の都合上、できる限り事前の申し込みをお願いいたします。

大会参加費：

一般会員 3,000 円

学生会員 1,000 円

事前登録締め切り後：

一般会員 4,000 円

学生会員 1,000 円

6. 昼食

キャンパス周辺は住宅地であるため、飲食店の数は多くありません。学食の営業は確認でき次第、HPでお知らせしますが、営業している場合はそちらのご利用をお願いします。また必要に応じて弁当を手配いたします。なお、学内での飲食につきましては黙食の徹底をお願いいたします。

7. 懇親会

開催いたしません。東小金井駅（キャンパス最寄り駅）を始め、中央線沿線に飲食店があります。個別の懇親会の際は、大人数を避け、感染対策を施した店のご利用をご検討ください。

8. 宿泊

新宿、中央線沿線などのホテルを各自でご予約ください。通勤時の混雑を考慮して、東小金井駅よりも都心側のホテルをお勧めします。

9. アクセス

下記URLをご覧ください。

<https://www.hosei.ac.jp/koganei/access/>

車での入構はできません。

10. 大会事務局

〒184-8584 東京都小金井市梶野町 7-3-1

法政大学生命科学部

第 55 回日本原生生物学会大会事務局

(庶務：豊岡 博子)

電話：042-387-6391

Email: jsp2022.molcellbio@gmail.com

学会活性化委員会からのお知らせ

委員長・保科 亮（長浜バイオ大学）

- ・日本原生生物学会第55回大会（東京）でシンポジウムが開催されます。ひさびさにオフラインでの大会です。ぜひご参加ください。

タイトル: 原生生物のジオラマ行動力学（オーガナイザー: 西上 幸範）

日時: 9月3日（土）午後

場所: 法政大学小金井キャンパス 西館マルチメディアホール

- ・5月27日に北海道帯広市で開催された寄生虫学会のサテライトシンポジウム「原生生物学・共生生物学談話会」を一部支援いたしました。

原生生物学会には、学会の活性化につながる活動を支援する予算があります。原生生物学会をPRできるような活動には支援を厭いませんので、どしどしご応募ください。

学会等開催情報

◆国際会議

会議名：The 16th International Congress of Protistology-Joint Meeting of ICOP/ISOP/ISEP

期日：2025年6月22日－27日

開催場所：韓国 ソウル（Sungkyunkwan University：成均館大学校）

連絡先等：大会のHPはこちら <http://icop2025.org/register/2021/info/sub02.html>

学会員による著作物

「寄生虫のはなし ―この素晴らしき、虫だらけの世界―」

永宗喜三郎・脇 司・常盤俊大・島野智之（編）

朝倉書店 ISBN 978-4-254-17174-7

2020年発行，全168ページ，価格3,300円（税別）

「おもしろ ミクロ生物の世界 ミジンコ・アメーバ・ゾウリムシ なかまたちが大集合！」

末友靖隆・著 / 友永たろ・イラスト

偕成社 ISBN 978-4035271604

2019年発行，全80ページ，価格2,800円（税別）

若手の会 通信

原生生物エッセイ・コラム

あの夏の思い出 ～小学生の自由研究～

島田雄斗 (高知大学)

現在、私は毎日のように大学の実験室で様々な原生生物を顕微鏡下で観察している。観察していると、小学生の時にした夏休みの自由研究を思い出す。小学生の時、私は自由研究のために、家の近くにあるとても汚い川や池から水を汲み、水の中にいる微生物を顕微鏡で観察した。用いた顕微鏡は、通信教材の付録にあったプラスチック製の顕微鏡である。その時初めて、顕微鏡を使わないと見えない小さな生物(ゾウリムシやミジンコ)を見た。とても小さな生物が動き回るのを見た感動を今でも覚えている。私は生物の写真を撮り、観察レポートとして学校に提出し、自由研究を無事に終えた。

ただ、今思い返すと2つの疑問(思い出せない点)がある。1つは、動き回る生物をどのようにして写真に収めたのか。もう1つは、汲んできた水を濃縮していないにも関わらず、一滴の水をスライドガラスにのせるだけでなぜ様々な生物が観察できたのかということである。おそらく、誰もが子どもの時に持っていた、興味があることに没頭する、熱中する力により、何枚もプレパラートを作り、何枚も写真を撮った結果だろう。今思い返すと、なんとも果てしない作業である。島田少年に汲んできた水を濃縮する方法、生物の動きを止める方法を教えてあげたいものである。私はあの時の情熱を忘れずに研究活動に勤めたいと思う。

昆虫が媒介するヒト寄生性の原生生物

— 8月20日：世界蚊の日 (World Malaria Day) —

面田 彩馨 (神戸大学)

1897年8月20日、イギリス軍医のロナルド・ロスは寄生性の原生生物であるマラリア原虫が蚊を媒介してヒトに感染することを発見した。1902年には、一連の研究が評価されてノーベル生理学・医学賞を受賞した。授賞式では、世界が蚊とマラリアの関連に気づかなければならないとして、1902年8月20日を第1回目の世界蚊の日 (World Malaria Day) と宣言した¹⁾。マラリアは、熱帯・亜熱帯で流行する感染症で、年間およそ2億人の罹患者とおよそ60万人の死者を出す感染症である。対策は、マラリア原虫に感染した蚊に刺されないようにすることである。マラリア原虫を媒介するアノフェレス属の蚊は夜行性であるため、夜の対策が重要である。マラリア流行地であるアフリカでは、殺虫剤を染み込ませた蚊帳を張って、その中で寝ることが推奨されている。また、吸血後に屋内で休む習性を生かして、屋内残留殺虫剤噴霧が行われている²⁾。ロナルド・ロスの発見により、マラリアの予防策は大きく進展してきた。

マラリア原虫の他にも昆虫が媒介する原虫があり、全てトリパノソーマ科である。原虫の種類や流行地域によって、サシチョウバエ、ツェツェバエ、サシガメの3種類の昆虫が媒介者として存在する。まず、サシチョウバエはリーシュマニア原虫 (*Leishmania*) を媒介する。リーシュマニア原虫は、リーシュマニア症を引き起こす病原体で、熱帯・亜熱帯の98カ国に存在が確認され、年間90–170万人に感染する。次に、ツェツェバエはガンビアトリパノソーマ (*Trypanosoma brucei gambiense*)、ローデシアトリパノソーマ (*Trypanosoma brucei rhodesiense*) を媒介する。これらのトリパノソーマ原虫は、アフリカ睡眠病 (African sleeping sickness) を引き起こす病原体で、アフリカで流行している。最後に、サシガメはクルーズトリパノソーマ (*Trypanosoma cruzi*) を媒介する。クルーズトリパノソーマはシャーガス病を引き起こす病原体で、アメリカのテキサス州以南や中南米各地で流行している³⁾。

世界の広範囲で複数の昆虫が原虫の媒介に関与している。原虫感染症に対する旅行者に有効なワクチンは未だないため、これらの感染症が蔓延する地域へ向かう場合には、昆虫に刺されないようにすることが重要である。コロナウイルス流行も次第に落ち着きを見せ、再び海外へ行く人が増加するだろう。流行地域へ行く機会があれば、媒介昆虫の習性や刺されないための予防策を頭に入れておくことを私は強く推奨する。

(参考文献)

- 1) 「WORLD MOSQUITO DAY – AUGUST 20, 2022」 NATIONAL TODAY, <https://nationaltoday.com/world-mosquito-day/>, 2022年6月10日に利用
- 2) 「WHO GUIDELINES for malaria」 WHO, 2022
- 3) 吉田幸雄, 有蘭直樹, 山田稔「医動物学 改定 7版」南山堂, 2018

今後の予定

越後谷 駿 (北海道大学)

「2022年 原生生物研究者の卵による夏の勉強会」を開催します!

日時: 2022年7月31日(日) 13時～15時(予定)

場所: オンライン (Zoom)

1人10分程度の研究紹介を通して、参加者が互いに原生生物について学び合う勉強会を予定しています。今年9月に行われる学会前の練習や顔合わせも兼ねて、ご参加いただけますと幸いです。発表なしの参加もOKですので、気軽にお申し込みください。

参加申し込みは下記の Google Forms から!

<https://forms.gle/2DwM5XT5awKXRdb57>

(次ページのQRコードからも申し込みます。)



今年の学会で原生生物観察ブースを設置します！

今年9月に行われる第55回日本原生生物学会大会において、原生生物観察ブースの設置を予定しています。原生生物研究者が一堂に会する機会ですので、様々な原生生物の実物を見て交流・議論できる場になればと思います。

本企画は、大会長の廣野先生や大会実行委員会の先生方の協力を得ております。この場をお借りしてお礼申し上げます。

日本原生生物学会若手の会 会員募集中 島田 雄斗 (高知大学)

日本原生生物学会若手の会では、新しい会員（学生）を募集しています。若手の会では、定期的に研究発表会や交流会を開催しています。入会すると以下の

素晴らしい利点があります。
様々な原生生物について知ることができる
様々な研究手法について知ることができる
研究発表の練習をすることができる
研究仲間を作ることができる
研究の悩みや（先生の）愚痴を言い合うことができる

皆様、日々、研究室という限られた空間およびコミュニティで過ごしていると思います。故に、他大学の学生は、どんな研究をしているのだろう？どんな実験をしているのだろう？研究に行き詰った時どうしているのだろう？など、様々な疑問が生まれてきます。そのような疑問を若手の会を通して解決しませんか。気軽に話し合える若手研究者（学生）たちで、切磋琢磨し合って研究生生活をより良くしていきましょう！

若手の会に入会したい方は島田(shimaday@kochi-u.ac.jp)までご連絡ください。

2022年度 若手の会役員

会長： 越後谷 駿（北海道大学）
副会長： 島田 雄斗（高知大学）
会計： 面田 彩馨（神戸大学）

日本原生生物学会若手の会ホームページ
<https://youngprotistologis.wixsite.com/youngprotistologists>

本会記事

2021 年度 総会議事録

日 時：2021 年 11 月 22 日（月）13:00 ～ 14:50
オンライン開催

議事

I 会長挨拶

II 報告事項

1 庶務関係

洲崎 敏伸 庶務担当より、以下の報告があった。

イ. 会員の異動（2021 年 11 月 12 日現在）

		(昨年報告数)
賛助会員	1 団体	(1 団体)
名誉会員	10 名	(9 名)
永年会員	12 名	(13 名)
一般会員	95 名	(97 名)
学生通常会員	43 名	(30 名)
学生 1 年会員	16 名	(3 名)
準会員	23 名	(16 名)
合計	200 名	(169 名)

新入会 44 名, 退会 13 名

2 編集関係

洲崎 敏伸 編集長より、以下の報告があった。

イ. *Journal of Protistology* の 2021 年 11 月までに投稿された 2 報の論文の審査状況について、1 報は受理され公開準備中であること、もう 1 報は審査中であることが報告された。

ロ. 和文誌「原生生物」の 2021 年の発行状況について報告された。

3 その他

イ. 春本 晃江 学会賞等選考委員会委員長より、学会賞に細谷 浩史 会員「ミドリゾウリムシを用いた真核細胞間共生の成立機構」が、奨励賞に久富 理 会員「原生生物の行動変化に関わる繊毛運動の制御機構の研究」が選ばれたことが報告された。また、奨励賞に関して、選考基準や様式について今後細則の検討をしていく予定であると報告された。

ロ. 島野 智之 生物多様性会議委員より、日本分類学会連合第20回総会報告があった。内容は、主に国立沖縄自然史博物館が日本学術会議マスタープランの重点課

題に採択されたということ、遺伝単（遺伝学用語集）における「variation」の訳語について、データベース「日本産生物種数調査」について、気象庁の「生物季節観測」の中止に対する声明についてであった。

ハ. 末友 靖隆 活性化委員会委員長に代わり、有川 幹彦 会員より、活性化委員会報告があった。内容は、準会員数の増加について、分譲サービスにおけるテラベース株式会社との業務委託契約の締結について、ミクロ生物館内「樋渡文庫」および学会 HP 内「柳生・重中繊毛虫図鑑」の整備について、準会員制度の広報（フライヤーの印刷・配布）の状況について、学会・若手の会ロゴマークおよびデザインガイドラインの策定についてであった。また、採択されたロゴマークの発案者である久富 理 会員より、ロゴデザインのコンセプトについて説明があった。藤島 政博 会員より、分譲サービスにおけるテラベース株式会社との業務委託契約の内容および岩国市教育委員会（ミクロ生物館）と今後締結する予定である協定内容について、会員に情報共有し意見交換をする場を設けてほしいとの意見があり、有川 幹彦 会員より、今後評議員会で議論し、そのような機会を設定したいとの説明があった。

ニ. 春本 晃江 国際委員より、2021 年 11 月 18 日-21 日にオンラインで開催された iACOP-IV (The 4th Asian Congress of Protistology-internet, 大会長：春本 晃江 会長, 実行委員長：洲崎 敏伸 会員) について報告があった。また、開催にあたり ISOP から Zoom ライセンスのサポートがあったことが報告された。今後の国際会議については、2022 年に韓国（ソウル）で予定されていた XVI ICOP (The 16th International Congress of Protistology-Joint Meeting of ICOP/ISOP/ISEP) は 2025 年（2025 年 6 月 22 日-27 日）に再延期となったこと、2023 年にオーストリア（ウィーン）にて IX ECOP (European Congress of Protistology) が開催予定であることが報告された。また、2023 年から 2025 年頃に ACOP-V が開催予定であるが場所は未定であることが報告された。また、国際委員に関する細則の内容（関係する国際会議の国際委員会への出席）についての確認があり、今後の国際会議に向けて情報収集に注意してほしいとの説明があった。

ホ. 西上 幸範 ネットワーク委員会委員長より、ネットワーク委員会の活動報告があった。内容は、編集委員会からの要請に応じたウェブページ上の学会関連情報の更新について、選挙管理委員会の求めに応じた電子投票システム利用の補助、選挙の委託業者の選定（株式会社エム・イー・シー）について、メーリングリストなど、メールサーバーの運営・管理についてであった。

ヘ. 越後谷 駿 若手の会会長より、若手の会の 2021 年度活動報告と会計報告があった。活動内容としては、若手学生間の交流会や勉強会、イベント後援、若手の会 HP・和文誌「原生生物」若手の会通信への記事掲載

が報告された。

ト. 特命委員 (沼田 治 会員, 細谷 浩史 会員) に代わり, 有川 幹彦 会員より, 特命委員の 2021 年度活動に関して, 特段の報告事項や審議事項はないことが報告された。

チ. 細谷 浩史 選挙管理委員会委員長より, 会長・評議員選挙およびロゴマーク投票について, 以下の報告があった (選挙管理委員会: 細谷 浩史 委員長, 園部 誠司 会員, 廣野 雅文 会員, 福田 康弘 会員)。事務局, ネットワーク委員会, 株式会社エム・イー・シーと連携して選挙実施の準備を進め, 電子投票システムによる選挙 (一部, 郵便投票) を行ったこと, 株式会社エム・イー・シー担当者同席の下, 選挙管理委員会委員による開票作業が行われ, 次期会長・評議員当選者およびロゴマーク投票結果を確定し, 事務局へ報告したことが説明された。

リ. 洲崎 敏伸 庶務担当から, 会長・評議員選挙の結果について, 園部 誠司 新会長と 16 名の評議員 (明松 隆彦, 有川 幹彦, 石田 正樹, 岩本 政明, 北出 理, 島野 智之, 杉浦 真由美, 洲崎 敏伸, 西上 幸範, 沼田 治, 廣野 雅文, 福田 康弘, 保科 亮, 細谷 浩史, 堀 学, 矢吹 彬憲) が選出されたことが報告された。

III 審議事項

オンラインによる審議は Zoom の投票システムにより行われた (出席会員数の過半数以上の賛成・承認により可決)。

1 会計関係

イ. 2020 年度会計決算報告および会計監査報告

有川 幹彦 会計担当より報告がなされた後, 芳賀 信幸, 細谷 浩史 両監事による監査報告があり, 承認さ

れた (賛成・承認: 過半数以上)。

ロ. 2021 年度会計決算報告および会計監査報告

有川 幹彦 会計担当より 2021 年度会計決算報告があり, 芳賀 信幸, 細谷 浩史 両監事による監査報告がなされた。会計年度が総会前日までであることから, 監査報告は次年度総会で報告されるべきとの意見があり, 種々意見交換が行われ, 次年度以降の方針については今後検討されることとなった。2021 年度会計決算報告および会計監査報告については, 審議の結果, 原案通り承認された (賛成・承認: 過半数以上)。

ハ. 2022 年度予算案について

有川 幹彦 会計担当より次年度の予算案について報告がなされ, 原案通り承認された (賛成・承認: 過半数以上)。

IV その他

1 次期・次々期大会について

イ. 廣野 雅文 会員より, 次期 (2022 年, 第 55 回大会) は, 廣野 雅文 会員を大会長として, 9 月初旬に法政大学小金井キャンパスで開催予定であることが報告された。対面形式での実施を予定していること, 新型コロナウイルスの感染状況によってはオンライン開催になる可能性があることが説明された。また, 有川 幹彦 会員より, 次々期 (2023 年, 第 56 回大会) は, 次期・場所ともに未定であるとの説明があった。

2 新会長挨拶

イ. 園部 誠司 次期会長より, 就任にあたり挨拶があった。

2020年度 日本原生生物学会一般会計決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	3,252,224	3,544,849
学会費 (*1)	800,000	195,500
寄付	-	-
雑収入	10,000	-
利息	27	24
計	4,062,251	3,740,373

*1: 学会費納入率 26.5%

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
学会誌印刷代 (含郵送費)	50,000	-
編集諸経費・謝金	200,000	87,990
学会活性化委員会経費	200,000	-
庶務諸経費・謝金	50,000	-
会計諸経費・謝金	10,000	3,858
大会補助費	200,000	200,000
学会賞等経費	40,000	20,000
若手の会助成金	50,000	-
日本分類学会連合分担金	10,000	10,000
日本分類学会連合会議旅費	10,000	70,860
通信費	15,000	9,880
振替手数料	3,000	1,200
支出総計	838,000	403,788
次年度繰越金	3,224,251	3,336,585
計	4,062,251	3,740,373

2020年度 日本原生生物学会特別会計 (国際交流基金) 決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	452,704	452,706
寄付	-	-
利息	2	4
計	452,706	452,710

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
外国人招待者謝金	100,000	-
国際学会参加援助金	-	-
振込手数料	-	-
支出総計	100,000	0
次年度繰越金	352,706	452,710
計	452,706	452,710

2020年度 日本原生生物学会特別会計 (学会基金) 決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金 (定期預金)	1,034,148	1,034,153
寄付	-	-
利息	5	10
計	1,034,153	1,034,163

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
日韓合同会議開催補助費	200,000	-
支出総計	200,000	0
次年度繰越金	834,153	1,034,163
計	1,034,153	1,034,163

2020年度 日本原生生物学会特別会計 (月井雄二記念国際交流基金) 決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	9,248,272	9,248,357
寄付	-	-
利息	92	78
計	9,248,364	9,248,435

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
国際学会参加援助金	-	-
振込手数料	-	-
支出総計	0	0
次年度繰越金	9,248,364	9,248,435
計	9,248,364	9,248,435

2021年度 日本原生生物学会一般会計決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	3,310,313	3,336,585
前年度大会補助金残金	30,000	186,534
学会費 (*1)	731,500	629,500
寄付	-	-
雑収入	10,000	-
利息	24	11
計	4,081,837	4,152,630

*1: 学会費納入率 82.8%

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
編集諸経費・謝金	100,000	-
学会活性化委員会経費	200,000	-
庶務諸経費・謝金	50,000	29,852
会計諸経費・謝金	10,000	2,584
大会補助費	200,000	-
学会賞等経費	40,000	20,000
若手の会助成金	50,000	-
日本分類学会連合分担金	10,000	-
日本分類学会連合会議旅費	50,000	-
通信費	15,000	-
振替手数料	3,000	840
選挙に係る経費	50,000	29,804
支出総計	778,000	83,080
次年度繰越金	3,303,837	4,069,550
計	4,081,837	4,152,630

2021年度 日本原生生物学会特別会計（国際交流基金）決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	452,710	452,710
寄付 (*1)	-	45,000
利息	4	2
計	452,714	497,712

*1: 沢田 健 会員 10 口、見上一幸 会員 5 口

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
外国人招待者謝金	-	-
国際学会参加援助金	-	-
振込手数料	-	-
支出総計	0	0
次年度繰越金	452,714	497,712
計	452,714	497,712

2021年度 日本原生生物学会特別会計（学会基金）決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金（定期預金）	1,034,163	1,034,163
寄付 (*1)	-	15,000
利息	10	5
計	1,034,173	1,049,168

*1: 高橋三保子名誉会員1口、三輪五十二会員2口、丸山正会員2口

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
支出総計	0	0
次年度繰越金	1,034,173	1,049,168
計	1,034,173	1,049,168

2021年度 日本原生生物学会特別会計（月井雄二記念国際交流基金）決算報告

1. 収入の部

科 目	予算額	決算額
前年度繰越金	9,248,435	9,248,435
寄付	-	-
利息	78	39
計	9,248,513	9,248,474

2. 支出の部

科 目	予算額	決算額
国際学会参加援助金	-	-
支出総計	0	0
次年度繰越金	9,248,513	9,248,474
計	9,248,513	9,248,474

2022年度 日本原生生物学会一般会計予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
前年度繰越金	4,069,550
学会費 (*1)	758,000
利息	11
計	4,827,561

*1: 2021年度会員数より試算。ただし学生一年会員を含まず。

2. 支出の部

科 目	予算額
編集諸経費・謝金	100,000
学会活性化委員会経費	200,000
庶務諸経費・謝金	50,000
会計諸経費・謝金	10,000
大会補助費	200,000
学会賞等経費	40,000
若手の会助成金	50,000
日本分類学会連合分担金	10,000
日本分類学会連合会議旅費 (2名分)	50,000
通信費 (サーバー利用料)	15,000
振替手数料	3,000
支出総計	728,000
次年度繰越金	4,099,561
計	4,827,561

2022年度 日本原生生物学会特別会計 (国際交流基金) 予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
前年度繰越金	497,712
寄付	-
利息	2
計	497,714

2. 支出の部

科 目	予算額
外国人招待者謝金	-
国際学会参加援助金	-
国際学会参加援助金振込手数料	-
支出総計	0
次年度繰越金	497,714
計	497,714

2022年度 日本原生生物学会特別会計 (学会基金) 予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
前年度繰越金	1,049,168
利息	5
計	1,049,173

2. 支出の部

科 目	予算額
	-
支出総計	0
次年度繰越金	1,049,173
計	1,049,173

2022年度 日本原生生物学会特別会計 (月井雄二記念国際交流基金) 予算案

1. 収入の部

科 目	予算額
前年度繰越金	9,248,474
寄付	-
利息	39
計	9,248,513

2. 支出の部

科 目	予算額
国際学会参加援助金	-
支出総計	0
次年度繰越金	9,248,513
計	9,248,513

その他

学会賞受賞者名一覧等

日本原生生物学会賞受賞者名

1991 年	沼田 治 (筑波大学) テトラヒメナの多機能タンパク質の研究
1992 年	田邊 和裕 (大阪工業大学) マラリア原虫の寄生に関する分子生物学的研究
1993 年	彼谷 邦光 (国立環境研究所) 環境適応における脂質分子の役割
1994 年	今井 壯一 (日本獣医畜産大学) ルーメン内繊毛虫の分類学的研究
1995 年	見上 一幸 (宮城教育大学) ゾウリムシの二核性と核分化の研究
1996 年	藤島 政博 (山口大学) ゾウリムシとホロスボラの共生における宿主-共生生物間相互作用
1997 年	(受賞者なし)
1998 年	芳賀 信幸 (石巻専修大学) イマチユリン: 未熟期の分子機構
1999 年	廣野 雅文 (東京大学) クラミドモナスの非保存的アクチン
2000 年	松岡 達臣 (高知大学) 繊毛虫ブレファリスマのキノン光センサーと光シグナリング
2001 年	長澤 秀行 (帯広畜産大学) トキソプラズマ感染に対する宿主免疫システム
2002 年	春本 晃江 (奈良女子大学) 繊毛虫における細胞間相互作用
2003 年	洲崎 敏伸 (神戸大学) ユーグレナの細胞体変形運動
2004 年	(受賞者なし)
2005 年	(受賞者なし)
2006 年	(受賞者なし)
2007 年	(受賞者なし)
2008 年	(受賞者なし)
2009 年	(受賞者なし)
2010 年	岩本 政明 (情報通信研究機構) テトラヒメナの大核と小核の核膜孔複合体タンパク質の研究
2011 年	(受賞者なし)
2012 年	(受賞者なし)
2013 年	(受賞者なし)
2014 年	月井 雄二 (法政大学) 接合型の遺伝解析に基づくゾウリムシの種分化過程に関する研究

2015 年	園部 誠司 (兵庫県立大学) 原生生物における運動の分子機構に関する研究
2016 年	小林 富美恵 (杏林大学) マラリア原虫感染に対する宿主免疫機構
2017 年	児玉 有紀 (島根大学) ミドリゾウリムシを用いた二次共生の成立機構の研究
2018 年	島野 智之 (法政大学) 土壌環境を中心とした自由生活性の原生生物における種多様性及び生態の解明
2019 年	永宗 喜三郎 (国立感染症研究所) トキソプラズマの寄生戦略に関する分子細胞生物学的研究
2020 年	(受賞者なし)
2021 年	細谷 浩史 (神奈川大学) ミドリゾウリムシを用いた真核細胞間共生の成立機構

日本原生生物学会教育賞受賞者名

2016 年	楠岡 泰 (琵琶湖博物館) 微小生物の魅力を伝える琵琶湖博物館
2017 年	(受賞者なし)
2018 年	(受賞者なし)
2019 年	(受賞者なし)
2020 年	盛下 勇 原生生物学の応用研究とその普及活動～原生動物と共に 70 年～

日本原生生物学会奨励賞受賞者名

2004 年	杉浦 真由美 (奈良女子大学) 繊毛虫ブレファリスマにおける接合誘導物質の分子生物学的研究
2005 年	有川 幹彦 (奈良女子大学) 太陽虫の細胞質および核における Ca^{2+} 依存性収縮系の解析
2006 年	(受賞者なし)
2007 年	西原 絵里 (東京医科歯科大学) <i>Amoeba proteus</i> の収縮胞における水集積機構の研究
2008 年	児玉 有紀 (筑波大学) ミドリゾウリムシと共生クロレラの細胞内共生成立機構の研究
	Kim Thi Phuong Oanh (Vietnam Academy of Science and Technology)

2009 年	Stop codon reassignment in ciliates: evidence for different modes of stop codon recognition by ciliate eRF1s 福田 康弘 (東北大学)
2010 年	Nuclear proteins and chromosome structures of the ancestral dinoflagellate <i>Oxyrrhis marina</i> 保科 亮 (立命館大学)
2011 年	ミドリゾウリムシ共生藻の分類学的研究 明松 隆彦 (ヨーク大学)
2012 年	繊毛虫テトラヒメナのプロテオーム解析 (受賞者なし)
2013 年	(受賞者なし)
2014 年	西上 幸範 (京都大学)
2015 年	試験管内再構築系を用いたアメーバ運動における細胞質ゾルーゲル変換機構に関する研究 (受賞者なし)
2016 年	末友 靖隆 (岩国市ミクロ生物館)
2017 年	原生生物の認知度向上と教育分野への利活用 矢吹 彬憲 (海洋開発研究機構)
2018 年	新規系統の発見と理解から読み解く真核生物の多様性と進化プロセス (受賞者なし)
2019 年	ソン チホン (生理学研究所)
2020 年	繊毛虫ミドリゾウリムシにおける細胞内共生機構の解析 矢崎 裕規 (理化学研究所)
2021 年	大規模配列データ解析による真核生物の進化・多様性の解明 久富 理 (山梨大学)
	原生生物の行動反応に関わる繊毛運動の制御機構の研究

第15回	広島市	昭和56年	重中 義信
第16回	東京都	昭和57年	石井 俊雄
第17回	津 市	昭和58年	安達 六郎
第18回	東京都	昭和59年	浅見 敬三
第19回	大分県	昭和60年	山高 里盛
第20回	東京都	昭和61年	小山 力
第21回	山口市	昭和62年	星出 一巳
第22回	つくば市	昭和63年	渡辺 良雄
第8回	国際原生動物学会		
	つくば市	平成元年	樋渡 宏一
第23回	長崎市	平成2年	神原 廣二
第24回	伊勢原市	平成3年	金田 良雅
第25回	奈良市	平成4年	菅沼 美子
第26回	石巻市	平成5年	樋渡 宏一
第27回	帯広市	平成6年	鈴木 直義
第28回	小金井市	平成7年	鶴原 喬
第29回	東広島市	平成8年	細谷 浩史
第30回	水戸市	平成9年	三輪 五十二
第31回	岐阜市	平成10年	野澤 義則
第32回	仙台市	平成11年	渡辺 彊
第33回	金沢市	平成12年	遠藤 浩
第34回	神戸市	平成13年	洲崎 敏伸
第35回	高知市	平成14年	松岡 達臣
第36回	東京都	平成15年	今井 壯一
第37回	山口市	平成16年	藤島 政博
第38回	帯広市	平成17年	長澤 秀行
第39回	神埼市	平成18年	高橋 忠夫
第40回	富山市	平成19年	野口 宗憲
第41回	つくば市	平成20年	沼田 治
第42回	石巻市	平成21年	芳賀 信幸
第43回	水戸市	平成22年	三輪 五十二
第44回	奈良市	平成23年	春本 晃江
第45回	姫路市	平成24年	園部 誠司
第46回	東広島市	平成25年	細谷 浩史
第47回	仙台市	平成26年	見上 一幸
第48回	東京都	平成27年	八木田 健司
第49回	岡山市	平成28年	安藤 元紀
第50回	つくば市	平成29年	沼田 治
第51回	松江市	平成30年	児玉 有紀
第52回	水戸市	令和元年	北出 理
第53回	オンライン	令和2年	洲崎 敏伸
第54回	オンライン	令和23年	有川 幹彦

これまでの大会開催地及び大会長

	開催地	開催年度	大会長
第1回	小平市	昭和42年	藤田 潤吉
第2回	吹田市	昭和43年	猪木 正三
第3回	広島市	昭和44年	尾崎 佳正
第4回	東京都	昭和45年	松林 久吉
第5回	徳島市	昭和46年	尾崎 文雄
第6回	仙台市	昭和47年	樋渡 宏一
第7回	奈良市	昭和48年	稲葉 文枝
第8回	東京都	昭和49年	石井 圭一
第9回	大阪市	昭和50年	高田 季久
第10回	東京都	昭和51年	盛下 勇
第11回	岐阜市	昭和52年	野澤 義則
第12回	横浜市	昭和53年	斎藤 実
第13回	吹田市	昭和54年	中林 敏夫
第14回	つくば市	昭和55年	渡辺 良雄

会長・副会長・各種委員・評議員一覧

(2022年7月15日現在)

会 長：園部 誠司

副 会 長：堀 学

庶 務：福田 康弘

庶務補佐：杉浦 真由美

会 計：岩本 政明

会計補佐：明松 隆彦

編集委員会：

石田 正樹（編集委員長），島野 智之（英文誌編集長），岩本 政明（英文誌担当），上野 裕則（英文誌担当），永宗 喜三郎（英文誌担当），廣野 雅文（英文誌担当），矢吹 彬憲（和文誌編集長），内之宮 光紀（和文誌担当），柴田 あいか（和文誌担当），西上 幸範（HP担当），梁瀬 隆二（HP担当），福田 康弘

国際委員：

園部 誠司（会長），島野 智之，福田 康弘

学会賞等選考委員会：

園部 誠司（委員長），小林 富美恵，細谷 浩史

学会活性化委員会：

保科 亮（委員長），北出 理，柴田 あいか，西上 幸範，矢崎 裕規

準会員・生物分譲サービス WG：

園部 誠司（WG 長），有川 幹彦，洲崎 敏伸，春本 晃江

ネットワーク委員会：

西上 幸範（委員長），越後谷 駿，杉浦 真由美，福田 康弘，矢崎 裕規，梁瀬 隆二

生物多様性会議委員：

島野 智之

学術会議担当委員：

細谷 浩史

選挙管理委員会：

小林 富美恵（委員長），沼田 治，野田 悟子，矢吹 彬憲

事務局：

園部 誠司（会長），堀 学（副会長），福田 康弘（庶務），杉浦 真由美（庶務補佐），岩本 政明（会計），明松 隆彦（会計補佐），石田 正樹（編集委員長）

評議員：

明松 隆彦，有川 幹彦，石田 正樹，岩本 政明，北出 理，島野 智之，杉浦 真由美，洲崎 敏伸，西上 幸範，沼田 治，廣野 雅文，福田 康弘，保科 亮，細谷 浩史，堀 学，矢吹 彬憲

監事：

児玉 有紀，永宗 喜三郎

事務局からのお知らせ

庶務 福田 康弘（東北大学）・庶務補佐 杉浦 真由美（奈良女子大学）

会員各位，平素より学会活動に御協力をいただき，篤く御礼を申し上げます。会員向けメーリングリストでご案内したとおり，一昨年度から続けているコロナ

禍に対する緊急対策として，本年度も学生会員（通常・一年とも）の年会費を免除しております。納付の必要はございませんのでご注意ください。

編集委員会からのお知らせ

「原生生物」編集長・矢吹 彬憲（海洋研究開発機構）

和文誌「原生生物」は本巻より新しい体制で編集・発刊しております。前和文誌編集長であられた道羅先生から引き継いだものをしっかりと守りながら，今後も会員にとって重要な情報の発信と交換，そして憩いの場として活用していただけるように精一杯頑張っております。新たに編集委員として加わっていただいた柴田あいか先生（筑波大学），内之宮光紀先生（電力中央研究所）と編集委員長である石田正樹先生（奈良教育大学）と協力しながら責任とやりがいを持って運営

していきますので，引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

次号，2022 年 12 月発刊予定の和文誌「原生生物」第 5 巻第 2 号に掲載する原稿の締め切りは，11 月上旬頃を予定しております。それに向けて，ぜひ原稿をご準備いただければ幸いです。

和文誌「原生生物」投稿規定は[こちら](#)

会費等振り込み先

郵便振替口座

郵便振替口座番号：01300-6-103583

加入者名：日本原生生物学会

銀行振り込み口座

ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）

店番：139 カナ店名：イチサンキュウテン（139 店）

当座貯金 口座番号：0103583

受取人カナ氏名：ニホンゲンセイセイブツカ ツカイ

原生生物（GENSEI-SEIBUTSU） 第 5 巻 第 1 号

2022 年 7 月 15 日 発行

編集兼発行者：日本原生生物学会

発行所：日本原生生物学会

事務局：庶務担当 福田 康弘，杉浦 真由美

E-mail: gajsp@protistology.jp

編集局：〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町 2-15

海洋研究開発機構 生態研究棟内

「原生生物」編集長：矢吹 彬憲

Tel/Fax: 046-867-9498/046-867-9525

E-mail: yabukia@jamstec.go.jp
